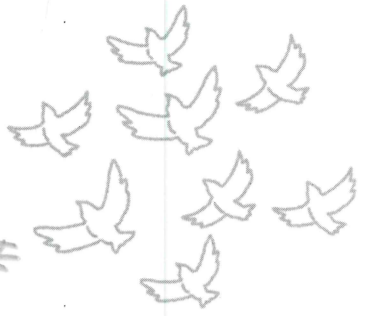


「平和大使として学んだこと」

原爆のおそろし



西初石小学校 6年 氏名 松田 和幸

資料館の展示が私に最も訴えたこと、それは、戦争の悲惨さとこれ以上核兵器を使ってはならないという思いでした。一瞬にしてたくさん命を奪う核兵器をこれ以上絶対に使ってはならないという思いがひしひしと伝わってきました。

今回、平和大使として、原爆のことをよく知れた。そして、やけどで皮膚が垂れ下がっていたり、子どもをなくし、「目を開けて、目を開けて」と、叫ぶ母親などのこととても悲しい光景を目の当たりにし、とても心が苦しくなりました。今、ロシアとウクライナで戦争が起きています。もう、このような悲しい事は絶対に、絶対に起こしてはなりません。一秒でも早く戦争をやめてほしいです。

また、被爆体験伝承者のお話でも、とても悲しい事が起きていたことが分かりました。水を求め、川へ行く被爆者たち。一度たお水で起き上がり、もう一度たお水たら、もう起き上がることはない被爆者たち。お話をし

くだった方も、もしあの時水をあげていたら、少しでも大切な命を救えたんじゃないかと、心に大きな傷を負っているそうです。もうこのような事をくり返してはならないという思いが心にとても強く響きました。

わたしは、大きな決意をしました。それは、少しでも原爆が起きないようにするために、周りの人に、今回学んだとても貴重な経験のすべてを広めていくということです。そして、被爆者の方の気持ちや未来に伝え、この経験を無駄にしないように努力していきます。



# 「平和大使として学んだこと」

原子爆弾のおそろしさを知って



南流山小学校 6年 氏名 丸山 あい

七十八年前の八月六日、広島は真赤な炎に包まれた。原子爆弾だ。そして真黒な雨が降り、十何万人も亡くなった。また、今でも後遺症に苦しんでいる人がいる。私は、平和について学ぶため、平和大使として広島へ行った。

広島では、いろんな事を学んだ。まず、被爆体験伝承者の方の話聞いた。広島に原子爆弾がおとされた時、あたりは暗くなっていたという。周りを見るとそこは火の海で、人々は血だらけで、ひふがたれさばり、あつい、あつい、助けて、

と言いなびら、たおれていったそうた。私は想像するだけでもとても悲しくなった。しかも、命を無事とりとめた人も、原爆の子の像の襦子さんのように、白血病になり、せくなったり、ずつと苦しむことになる人もいるのだ。でも、私が一番おもしろいのは、平和記念資料館の被爆した人たちの絵や写真だ。現実とは思えない、想像を絶する絵や写真に鳥

肌や立ち、とてもこわくなった。その絵や写真からは、苦ししい、助けて、

とうとうたえていけるように思えた。本当はもっと長生きできたのに、と思いい、とても悲しくなった。平和記念式典では、平和への誓いがとても心に残った。特に最後の「平和だと思える未来を私たちがつくりていきます」の言葉が、とても心に残った。

私は、平和大使として、広島へ行き、戦争は二度とやってはいけないと改めて感じた。けれども、今もなお核という凶器を作り、戦争をしていける国がある。そんな中で私たちはみんなが笑顔で、争い事の起きない平和な世代になるために、家族や友人、いろんな世代の人たちに、戦争はやめてはいけないと、伝えていきたい。それが平和大使としての役割だと思ふ。

「平和大使として学んだこと」

# たくさんの命を失った原子爆弾



小山 小学校 五年 氏名 峰松 沙英

78年前の8月6日に原爆が投下され、たくさんの方の命が失われました。

原爆により多くの家は火事で無くなり、水や食料が汚れてもまっただけ、しばらく口にできなくなりました。

被ばくした人に話を聞いたところ、まだ小さい子供たちが、壁に石を使ってお絵描きをしていたり、被ばくしたところで被ばくし、大ヤケドをして夕方になつてしまつてしまつてしまつて、被ばく後水が求むて川に飛び込んだことで多くの方が

亡くなつてしまつたケースがあつたようです。また、多くの方がヤケドやケガがもつていたり、10月になると白血病などの病気があつて亡くなつた。と聞きまじりました。

この時の広島の様子は、じごくのようだと話していただきました。被ばく者の話から、焼け野原が広がり、そこにたくさんの方の遺体がある状況が目に浮かぶようで、その様子を見た人は想像を絶するほどの悲しさだつたように感じました。

今の時代はロシア・ウクライナで戦争が続いています。戦争などにより、世界で九人に一人が食する物や飲み物が無いと言われていきます。このよふな悲惨な戦争をくり返さないように、みんなと一緒に平和な街を未来へと作つてほしいなと思います。

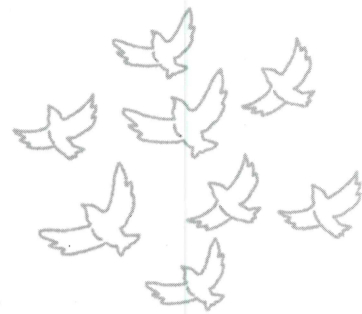
みんなが協力をして平和な未来を作つていくことで、今でも続いていく戦争は終わりにできると思い、原爆や核兵器は、使う必要はなくなるのではないかと思います。私たちが

原爆は経験してはいないけれども、私たちにできることがあるということ、今回広島に行つて強く感じました。

広島に行き、見たり聞いたりして、「平和」について考えることで、少しずつ「平和」の持つ意味にのろえわかつてきたように思います。今でも世界中には、戦争により苦しんでいる人もたくさんいます。その人たちが苦しまなくて良くなるように、みんなが平和というものを作り上げていきたいと思ひました。

「平和大使として学んだこと」

# たくさん命を失った原子爆弾



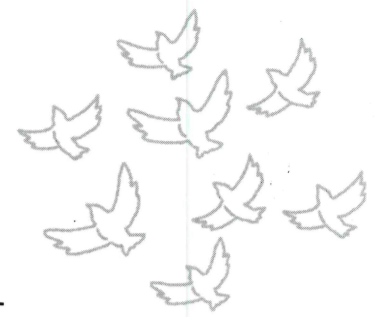
小山 小学校 五年 氏名 峰松 沙英

たくさん命を奪われない、失ってはいかない  
ためにも、戦争の持つ悲惨さや平和の大切を  
夏休みが終わったから友達や先生に伝えた  
と思います。

広島で学んだことを、色々な人に話して原  
子爆弾による悲劇は二度とくり返してはいけ  
ないことを伝えようと思います。また、平和  
を作り合っていくには何をしなければいいの  
だろうということや、戦争のない、核兵器のな  
い未来にしていくにはどうすればいいかを、  
みんなと話合っていきたいと思います。

「平和大使として学んだこと」

78年前 広島の日



おおたかの森小学校 6年 氏名村辻 楓

私は原爆のことを全く知りませんでした。平和大使としての活動に参加して色々なことを知り、学びました。

広島平和記念資料館で印象に残ったものは3歳の子供の三輪車の展示です。三輪車でも通る遊んでいる時に原爆の被害にあいました。まだ三年しか生きていなくて、何もしていかない子供が被害を受けるのは理不尽なことだと感じました。

佐々木禎子さんが折った折り鶴から、千羽折ると願いが叶うと聞いて病気が治るようになると毎日ずつと折り続けていたけれども願いは叶わないで原爆症で亡くなってしまう自分と同じ年齢の子が亡くなるなんて考えられないことなので悲しい気持ちになりました。

原爆が投下されたとき、広島のみちには約35万人がいたと考えられています。そのうち約14万人がその年、1945年のうちに亡くなったと言われています。今年で33万9227人が亡くなりました。市内の建物のうち、約9割が半分

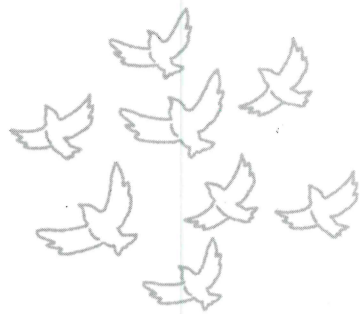
以上こわれたり焼いたりしました。放射線の被害は、爆心地から約1km以内に行った人の多くは数日のうちに亡くなりました。それだけでなく、しばらくの間放射線が地上に残ったため、家族を探したりきずついた人を助けるために後から広島市に入った人も病気になりました。亡くなったりしました。この被害から原爆はなくならなければいけないものだと私は思いました。

被爆を経験した方のお話を聞いて、とてもくわしく知ることができ、身近に感じました。原爆が投下される前も勉強ができなかったり、食べ物や生活に必要なものが不足していたりして大変だったと聞いてなぜ戦争をするのだろうかと思いました。

原爆のことがみんなの記憶からどんどん消えていくので自分が覚えている時に伝えていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

当たり前が宝物



おたかの森 小学校 6年 氏名 森田 新弥香

私は広島に行くまで、戦争と原爆は教科書にのっけていて、昔にあつた出来事だ他人事だと思つていました。今、当たり前に家族がいて、当たり前前に友達と笑い合える日々を過ごしている。そんな当たり前がたつた一発の原爆によって破壊されました。

平和大使として広島を訪れ、原爆ドームへ行き、衝撃をうけました。私がイメージしていたのは観光スポットのような場所だったが、三千度の爆風によつて一瞬にして広島の町がなくなり、今にもくずれ落ちそうな原爆ドームを見て核兵器のおそろしさも改めて知りました。

資料館へ行った時は、少しこわがったのですが、奥へ進んでいくうちにこわさが決心へと変わり、平和の尊さ、核兵器のおそろしさや理不尽にうばわれた、たくさん命のことも伝えねばならない、と、強く思いました。

二度とこんなことがおこらないでほしいと、被爆者のバリーさんの話を聞いて、印象に残

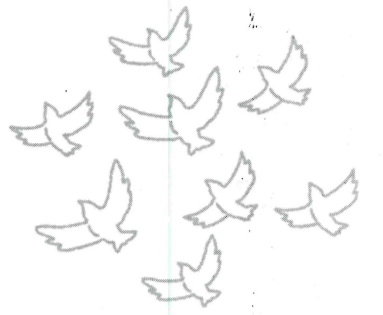
つた言葉は、「太田川の堤防そのぼると、広島は火の海で広島ではなくなつていた」という言葉がすごく印象に残っています。なぜなら、その時のことが想像でき、もし私がその場にいたら、怖くて怖くて仕方がないと思います。こんな悲惨なことを経験したのに、私たちに被爆証言をしてくれたバリーさんに感謝したいです。

私は、平和大使として広島へ行き、教科書に書いてあることだけではわからない事実を自分の目と耳で感じてきました。その真実を直接広島へ行き、おこなさんにも感じてほしいです。

今、当たり前前に過ごしている日常が当たり前ではないことを知ることができたので、家族と友達と笑つてすごせる当たり前を大切にしていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

もとれたら



流山市立長崎小学校 六年 氏名 役田 伍泉

みなさんは七十八年前の広島に戻れたら何をしますか？私は広島市民の人々に「にげると、伝えたいです。なぜなら、「まだ助けられる命があるかも」と、思うからです。前の私なら、何もできないと思っていました。ですが、広島に平和大使として行ってきたことで、考えが変わりました。今からは、広島で心を動かされたことを三つ伝えたいと思います。まず一つ目は、被曝体験者のお話です。その中で私が勿体無いと思ったのが、B29が何もしてこないことから「油断」でした。油断さえなければ、広島の人々は一人でも多く生き残れたかもしれせん。もしも誰かが気付けば被害が最小限にできたのに、思いました。

次に、平和記念資料館で見たものです。私が一番衝撃的だったのは、階段の中の人です。爆発の瞬間、約三千度から四千度の高温で、石も溶けてしまい、その時に座っていた人が

石の中に入ってしまった。普通では、考えられないことが起きていて、人の影だと分かった瞬間鳥肌が立ちました。原爆は、一瞬で広範囲に広がるため、にげ場がほとんどなくなっていくことに気がつきました。

最後に式典で聞いたことです。その中で、私がおどろいたことが同学年の勝岡英玲奈さんと米廣明留さんが子供代表として力強く訴えている姿でした。その訴えの中に「なぜ自分には生き残ったのか」という言葉がありました。

私はこの言葉から奇跡的に残った命というところが有難いことに気がつきました。この3つのことから「にげると、伝えたくまりました。原爆はとても恐ろしいものです。一瞬で尊い命が失われたこの悲劇は、二度とくり返さないためにこの先ずつと後世に語りつがなければいけないと思います。そして、戦争がいつかなくなる日が来るまで、私は平和を祈り続けたいと思いました。



# 「平和大使として学んだこと」

## 奪われた日常



小山 小学校 6年 氏名山北悠護

七十七年前の昭和二十年八月六日八時十五分。それまでの日常が一変した。その日はよく晴れていた。僕は「平和大使」として広島へ訪れるまで、原爆がどのようなものだったのかほとんど知らなかった。けれど、そんな僕でもとても被害が大きかった。たというのには分かっていました。広島へ向かう新幹線にゆられるなか、僕は緊張していた。今までは、テレビや新聞を通じて、閲覧するときに触れるだけだった。あの面と向かって原爆の被害と立ち合うのは、不安がたかうだ。僕が思っていたより被爆者さんのお話は、僕が思っていたよりもずつと辛いものだった。一瞬にして町が炎に包まれ、人がばたばたと倒れていく。お話の中で、僕が一番印象に残ったのは、人の皮膚が焼け、ドロドロになった、というところだ。想像するだけで、いやな気持ちになるのに、実際なるとして、人はどれだけ辛かったのだろう。僕は胸がしめつけられた。

他にも僕は感じたことがある。それは、今と昔での「日常」の差である。この作文の初めに、「日常」という言葉を使ったが、深く考えてみると、戦時中と、僕たちの生きていく。僕たちは、毎日学校に通い、毎食たべ、安心して眠る。しかし、戦時中では、いっ空も分らない。そんな不安を抱えたまま生きていなければならぬ。生きるために生まれてきたのに、なぜ人の手で終わらせられるのか。僕は強くそう思うと同時に、喜びも悲しみも、全てが色取りに満ちていくこの時代に、生きていくことに、とても大きなありがたさを感じた。もう過去は変えられない。しかし、僕たちにもできることはある。これから誕生する命に、過去を、そして未来を繋いでいくことだ。僕は、「平和大使」として広島へ行って、見て聞いたことを、心に留めて生きていく。

「平和大使として学んだこと」

命をつなぐ大切さ



八木北小学校 5年 氏名 横尾 桃次郎

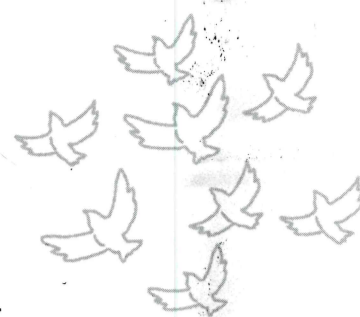
「もう無理だ」  
 目をそらしてはいけなけれど、見ているのが  
 辛くなった。資料館の中は、ぼくの見たこと  
 のないすさまじくひどい世界だった。そこに  
 はホロボロになった中学生の制服や、こげて  
 黒くなった三輪車などがあった。  
 一九四五年八月六日八時十五分、原爆が一  
 瞬にして中学生達や三才の子ども、たくさん  
 の広島の人々の命をうばった事を知りました。  
 被爆体験伝承者のパクさんは、「広島がな  
 くなつた」と、高台から全てがなくなつた広  
 島を見ていたそうです。自分の住んでいる所  
 が全てなくなるなんて想像がつかせん。今  
 ぼくの周りにはなんでもあって、不自由なく  
 くらせていることは、とても幸せなんだなと  
 思いました。  
 式典に参列して、子ども代表の「平和への  
 誓い」を聞きました。その言葉の中で「曾祖  
 父はうなせ、自分は生き残ったのか」と、仲  
 間を失って自分を責めた」という言葉があり

おどろきました。生きのびられた人達にまで、  
 心に深いきずを負わせ、苦しみをあたえ続け  
 るなんて、とても悲しいことだと思えます。  
 「生き残ってくれてありがとう」命をつな  
 いでくれたからこそ、今、私たちが生きてい  
 ます。という言葉をぼくの心に残っています。  
 もう戦争で悲しむ人が出ないように、みん  
 なで考えていかなければいけないと思います。  
 式典に参列した百十一カ国の国の人達、G7  
 で資料館を見学した首脳に、広島がどうなっ  
 たかをきちんと伝えてほしい。  
 ぼくも、ぼくのように広島の悲さんな出来  
 事を知らない人がたくさんいると思うので、  
 まずは学校のみんなに、そして大人になって  
 から必ずと伝え続けていきたいなと思いま  
 す。

# 「平和大使として学んだこと」

## 平和大使になって

東深井 小学校 5年 氏名吉原 禪



ぼくは平和大使として広島まで行きました。広島原爆で十四万人という大勢の人が大やけどしたり、フラッシュバーンという強力な熱線までひかたれ下がったりして赤ちゃんから大人まで多くの人が亡くなりました。原爆は一九四五年八月六日午前八時十五分広島に落とされました。広島平和記念公園にある平和記念資料館ではやけどを負った人など悲しそうな写真がたくさんありました。写真以外にも真黒になったおべん当箱や、とけた三輪車などが展示されていました。ぼくはそれを見て、そこにいた人たちはどれほど熱かったのだろうと苦しくなりました。次に原爆ドームに行きました。調べると原爆ドームは元々広島県物産陳列館という名前で広島県産品を展示販売する場所だったそうです。原爆ドームは今も形が残っています。原爆による爆発の強い威力を思い知りました。次の日には平和記念式典に参列しました。ぼく達以外にも沢山の人が参列していました。

たった一発の原爆だけで平和だった広島が一瞬間で焼け野原になりました。これは、本当におそろしいです。爆風は秒速約二百八十メートルでニキロ先の木造家屋でもとうかいます位の強さだったそうです。原爆が落とされた後、人々はふきとばされたり、がれきの下じきになったり、おけびで死した場所にいる虫がわいたり原爆が落ちた後にはたくさんのおひ害がありました。ぼくはよくお母さんに「おこられたり、兄弟ゲンカをすまじければこの毎日がとても平和で幸せな日々だと感じました。」

ぼくはあの時に七になった。ママの分まで一生けんめいに生きたいと思いました。二度とあのような悲しなことを十年たっても百年たっても十年たってもおきないよう願っています。ぼくは原爆のことをもっと調べても知識をつけて、友達や家族など周りの人に教え続けていきたいです。